

## 主体性を引き出す

～バン格拉デシュでリトルドクターと歩んだ日々～

足立 詠子（旧姓：楠山）

（コミュニティ福祉学科 2008年卒業）



### コミュニティ福祉の実践とは？

私なりの解釈では、上から（中央政府）のサービス提供ではなく、下から（コミュニティのメンバーが主体となって）皆がより暮らしやすい社会を作ることです。…言うは易く行うは！

今回は国際協力の現場（青年海外協力隊員としての活動）での実践例をご紹介しますと思います。

### ◆私の原点

私の国際協力への興味は尊敬から始まりました。中学3年生の時にカンボジアを訪れ、ダーチャという女の子と出会いました。私より少し年下の彼女は家庭が貧しく学校には通えず、観光客相手に物売りをしていました。そんな厳しい環境の中でも商売を通して学んだ英語を使いこなして逞しく生きる彼女を同世代として尊敬しました。と同時に、彼女の将来を考えると、生まれた国によって生じる選択肢の差に愕然としました。

その時から、能力ややる気がある子どもが、生まれた国に関わらず可能性を広げられる、そんな世界にしたいと思うようになりました。

### ◆学生時代

大学では国際福祉ゼミ（岡田ゼミ）に所属し、バン格拉デシュでのフィールドスタディにも参加しました。空港を出た瞬間のモワっとした熱気、おつかい帰りの子どもの手には生きたニワトリ、町中に鳴り響くアザーン（イスラム教のお祈りの合図）、日本とは全く違う世界に圧倒されました。そして、道端で、露店で、どこでも笑顔で声を掛けてくれる人懐っこい人たち、走り回っているだけで楽しそうな子どもたち、すっかりこの国の虜になってしまいました。

卒業後は4年間民間企業で社会経験を積み、その後2012年6月から2年4ヶ月、青年海外協力隊員としてバン格拉デシュで活動する機会を得ました。

## ◆バングラデシュでの活動

### とある学校の、とある一日

ここはバングラデシュの田舎にある小学校。

日本の1/3程の広さの教室に100人近くもの生徒がひしめき合っています。

毎日停電があるため、明かりはお日さま頼り。少しでも涼くなるようドアはいつも開けっ放し。長机に身を寄せ合った生徒たちは、各々教科書の音読を繰り返します。



授業風景

「ジー、サー」

今日も教室から何度も聞こえるこの合言葉。日本語で言うと「はい、先生」。

1（先生）:100（生徒）の授業ではどうしても一方的な講義になりがち。生徒たちは理解していてもしていなくても、反射的に「ジー、サー（はい、先生）」と答えます。

### 保健教育でもまた…

バングラデシュでは不衛生な環境や健康意識の低さ故に下痢症や寄生虫など、予防可能な病気に苦しむ人々がいまだに多くいます。そのため、保健教育は子どもたちの健康と生命を守るためのとても重要な活動とされています。

しかし保健教育もまた、例の調子で進んでいきます。

「食べる前には手を洗うんだぞ」「ジー、サー」

「ゴミはゴミ箱に捨てるんだぞ」「ジー、サー」

反射的に答えているだけの生徒たち。これが本当に生徒たちの健康に繋がるのだろうか？

廊下や窓の外にポイ捨てされたゴミの山を見つめながら考えました。

### 「ジー、サー」からの脱却

そんな受け身のバングラデシュの保健教育を改善する為に私は県保健局に配属されました。私が推進したのは、「Child to Child」をコンセプトに保健省主導で導入された新制度、その名も「リトルドクター」。

これは日本の保健委員のような制度で、各小学校で生徒の中からリトルドクター（＝保健委員）が選ばれ、身体測定の運営や（この国では自分の身長・体重を知らない子がほとんど!!）、他の生徒向けに手洗いや寄生虫・狂犬病等のテーマ毎に啓発活動を実施するというものです。

生徒たちが主体的に学べるリトルドクター。自分自身で考え、実践できるリトルドクター。

画期的なこのコンセプトに Bangladesh 保健教育改革の可能性を感じました。

しかしざ実践してみると課題は山積み。現場の先生たちは具体的にどう進めていけばよいかわからないし、時間もない。これをやっても給料が上がる訳ではないのでやる気が出ない。

私はこの新しい取り組みに前向きに参加してくれる学校（先生）探しから始めました。その中で出会ったとある校長先生の学校をモデル校とし、実践例を作っていくことにしました。



メジャーと定規で身長測定



保健教育のテーマをおさらいする校長先生とリトルドクター

### 校長先生がバイキンマンに!? ~先生や生徒の嬉しい変化~

モデル校ではまず、クラスで身の回りの健康課題について話し合い、それを防ぐ為のスローガンを作りました。さらにリトルドクターたちが集まりスローガンに沿った啓発劇を作ることに。元々劇や歌など創作活動が大好きな Bangladesh 人。あっという間に何種類もの劇を作り上げてくれました。そして他の生徒や保護者の前で発表。彼らにとっては大きな晴れ舞台になりました。

その様子を郡・県の教育局長に伝えると、モデル校を視察してくれることに。折角なので先生チームでも劇を作り披露。そこで校長先生がバイ菌役を熱演し、生徒にもゲストにも大ウケ。楽しい雰囲気の中、リトルドクターの具体的な実践例を示すことができました。加えて上司（教育局）に注目され始めたこともあり、徐々に活動に協力してくれる先生も増えていきました。

生徒の中にも嬉しい変化がありました。ある日学校に行くと、リトルドクターの一人が

▶ リレーメッセージ .....▶▶▶

ゴミ拾いをしていました。通常は掃除人を雇い、自分たちでは掃除をしない文化であるバングラデシュ。「なんでゴミ拾っているの？」と聞くと、「だって、学校にゴミが落ちていたら不衛生でしょ？そしたらみんなが病気になっちゃうかもしれないから。」

誇らしげに話す彼女の姿を見たとき、主体的な学びの大切さを実感しました。

その後…

帰国の約1年後、リトルドクターたちに会いに再びバングラデシュへ。そこでその後の活躍の様子を聞くことができました。

- ・ゴミ拾いをしていたリトルドクター（4人姉妹の末っ子、好奇心旺盛な私の愛弟子）  
彼女たちの劇を他の学校の先生にも見せたいと、郡教育局に呼ばれて発表したとのこと。学校では最高学年（5年生）になり、後輩たちの面倒も見る頼もしい様子でした。
- ・校長先生（いつもオシャレなアイディアマン、彼女の作った豆カレーは絶品）  
リトルドクター推進が評価され、2014年度の郡ベストティーチャーに選ばれたとのこと。「私は新しいことを考えるのが好き。それを実践できたのはEIKOと一緒にいて背中を押してくれたからよ」と嬉しそうに話してくれました。

小さな学校のほんの一部で始まった活動が、徐々に認められ広まろうとしています。

今後もみんなの健康のために主体的に活動し、さらに地域の人たちにも良い影響を与えられる、コミュニティ福祉の実践者になってくれることを期待しています。

次回はゼミの同期であり卒業後も頼りになる相談相手、相川秋生さんにバトンタッチ！



1年ぶりに再会したリトルドクターたちと